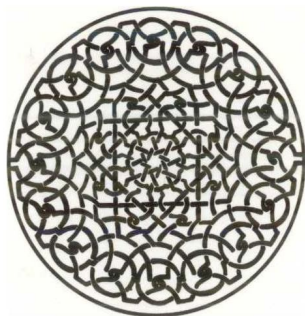


り島の日々

宮内勝典





みやうちかつつけ
著者●宮内勝典

とう ひ び
バリ島の日々

1995年7月10日第1刷発行

発行者●若菜 正

発行所●株式会社 集英社

〒101-50東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 編集部 (03) 3230-6100 販売部 (03) 3230-6393 制作部 (03) 3230-6080

印刷所●大日本印刷株式会社

製本所●文勇堂製本工業株式会社

©1995 宮内勝典 Printed in Japan

ISBN4-08-774151-6 C0095

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

28
り島の日々
宮内勝典



目次

出発前のごたごた

5

赤道をこえる

9

火の玉のような気魄も……

15

この、花一輪がなければ

21

千年をつらぬく恋

27



悪魔祓いの少女

おつかない樹と、影絵芝居の夜

神隠しの二日

とても不思議なバリの海峡

魔女がやってくる蓮池

海辺のホテルでカーテンを閉めきり

バリ島の岩戸がひらく

帰国後のあたふた

84

77

71

65

59

53

47

33





Cutting Rice Meda 72 × 136 cm

出発前のごたごた

もうどこへも行くまい、少くとも三年間は母国にしかと腰をすえようと思つて帰国したのに、バリ島へ行くことになった。しかもテレビの仕事である。西早稲田に小さな仕事部屋を借りてからこの半年の間に、外国へ行かないかと何度か誘われた。ラルフ・ローレンにインタビューして欲しいという見当ちがいの依頼もあった。現在のアメリカを代表するファッション・デザイナーらしいけれど、私はまったく無知であつた。

韓国へ同行して欲しい、カンボジアを取材してみないかという企画もあったけれど、迷わずその場で辞退してきた。いまは西早稲田の一室に踏みとどまつて小説に専念しようとしていたのだつた。ところが「バリ島に……」と誘われたとたん、あつけない、こころとよろめいてしまった。

バリ島に住もうか、と考えていたことがあつたからだ。ニューヨークの片隅で経済的にも追いつめられて、このままではホームレスになリかねないと焦りはじめていた頃だつた。家族会議をひらいて移住先をいろいろ検討した。東京で生まれ、四歳のと

きアメリカに拉致され二重言語で育ってきた息子は、コンピュータ少年となり、眼鏡をかけなければならなくなっていた。東京とニューヨーク、二つの大都市しか知らず、自室に閉じこもってコンピュータ・スクリーンとばかり向き合っている十二歳の息子をも、もう手遅れかもしれないけれど、せめて「自然」らしさの片鱗のあるところへ連れもどしたかった。

メキシコはどうだろうかと下見に行った。メキシコなら物価も安く、これまでの三分の一の生活費でやっていけるはずだ。けれど大気汚染がすさまじかった。高地の火山湖を埋めたメキシコ・シティは、焦茶色のスモッグの沼に沈んでいた。瀕死の小鳥が空から降ってくることもあるという。地方に住めば「自然」らしさはあるけれど、息子を入れるべき学校がない。これまで二重言語でつらい思いをさせてきたのに、さらにスペイン語でやり直させるわけにはいかない。しかし、インターナショナル・スクールがある都市では、頭上から小鳥が降ってくるのだ。

アリゾナかニューメキシコ州へ移り住もうかとも考えた。砂漠に住むのは長年の夢でもあった。アメリカ・インディアン^{インディアン}の酋長^{チーフ}から家族を連れて引越してきなさいと誘われてもいた。湧きたってくる雲の影が足もとを走り、空が青い鉱物のように見える半砂漠の荒地で、この惑星のネイティヴとして暮らしてみたかった。だが、それは私の夢にすぎない。「そんなとこ嫌だよ」という家族の反駁^{はんぱく}にあって、あえなく潰^{つぶ}える

しかなかった。砂漠にひっこんで生活していける経済的なあてもなかった。

考えあぐねながら街を歩いているとき、なぜか火山島のイメージが閃めいた。移動しつつある海底プレート、その何千メートルもの深海から太平洋上へ突きだし、山頂の火口のマグマが肉眼で見え、冬は雪さえ降りつもる四千メートル級の峰があるハワイ本島……。

家族会議にかけると、みんな乗り気になった。学校のことは問題がない。英語圏だから転校手続をするだけでいい。アメリカの永住権を持っているから、ヴィザの問題もない。ちゃんと税金を納めさえすれば、自動的に市民権も取れる。つまり日本国籍を捨ててアメリカ人になるということだが、むろん、そんなつもりは初めからまったくない。両棲類のように日米どちらにも自由に住めるのが便利だから永住権を持っているにすぎない。それにハワイ島なら日本と往き来するのも簡単だ。自然もある。ポリネシア系、日系、中国系、白人、黒人、さまざまの人種が混在しているから惑星のネイティブとして生きていくにはびったりの場所ではないか。

よし、ハワイ島に住もう、と家族の意見が一致した。コンピュータ少年の息子が真っ黒に日焼けして太平洋の波打ち際に遊んでいる姿など想像しながら、具体的にいろいろ調べてみたのだが、半年ほどで熱がひいていった。観光ならともかく、移住するとなるとマイナス点しか出てこないのだ。まず税金が高い。物価も高い。ハワイで生

産するもの以外すべて輸送費がかかっているから割高になるのだ。日本企業が買い漁っているため、土地も家もめちゃくちゃに高騰している。むろん家など手に入るとは思っていないが、アパート代もニューヨークより高いぐらいだ。これでは、よけい逼迫することは目に見えている。それにポリネシア文化のせめてもの余韻、なごりぐらいはあるだろうと期待していたのだが、ハワイ諸島ほとんどが日本企業に食い荒らされ、リゾート化している現実もいやおうなくわかってきた。反日感情も渦巻いている。そうした被害をもちに受けるのは息子である。学校も荒廃して、スクールバスの中で子供たちがドラッグをやっているという。そんな実情がわかるにつれて、ハワイ移住計画もあえなく立ち消えとなった。

代りに候補地として浮上してきたのが、バリ島であった。マーガレット・ミードや、G・ベイトソンの本を読むと、冷静な英国人であるベイトソンでさえも、バリ島に理想の社会モデルを見いだしたように昂ぶっている。文化人類学者の友人たちに聞くうちに、もう地上は隅々まで均質化されてしまったと断念しているすれっからしのこちらまで胸がざわめいてくる。けれどインターナショナル・スクールは、最も避けたい中心都市の一つあるだけだ。それに私の不徳のいたすところの一身上の問題もあって、バリ島移住計画もまた泡と消えていったのだった。

赤道をこえる

南半球にやってくるのは何度目だろうか。見えもしない赤道を通過するたびに、いつも奇妙に昂^{たか}ぶってしまう。群青色の海、ぎっしりと視界を埋めつくす密林、雨。そんなことを記述したところでなんになるのかと訝りながらも、その時だけ書くことの苦痛から少しばかり免がれている自分に気づく。

たとえば、エメラルド・グリーン^{エメラルド・グリーン}の波打ち際に rain forest 熱帯雨林の緑が迫り、赤い蛇のような川が……、こんなふうに見ることの喜び、眼の喜びだけを記述していけば内面の毒やおぞましさを洩らす必要もない。だからまた、性懲^{しょうと}りもなくそれを始めることにしよう。

今回の赤道はカリマンタン（ボルネオ）島の上空であつた。森も海も黒みがかってみえるほど濃い。ジャワ海にさしかかり、アイマスクを降ろしてう

とうと眠りかけている時、キーンと耳鳴りがした。しまった。私の耳は急激な高度変化に弱く、あくびなどして徐々に気圧変化に慣らさなければ、着陸後、人の声も聴きとれなくなってしまう。その準備ができないうちに機首はぐんぐん下がり、密雲のなかへ突入していく。窓の下方から上へ雨が吹きつけてくる。粒状の雨ではなく、水のかたまりが噴き上がってくる。潜水艦で水中へ沈降していくような錯覚が起こる。木星だったか金星だったか、その星に着陸しようとすれば、亜硫酸ガスかなにかの密雲のなかを、どこまでもどこまでも深く下降しつづければならないと聞いたことがあるが、いまは、水、水、水……。つくづく、ここは水の惑星だと思い知らされる。

水びたしの滑走路に熱帯の雨が降りしきっている。着陸の瞬間、水しぶきが上がり機体が白い霧に包まれる。見たことがある。ニカラグアへ航海する前、隣国の空港へ到着した時も、滝のなかに滑り込んでいくようだと感じたことがあった。ところが空港からマイクロバスでバリ島中部の Tjampuhan へ向かう途中の風景は、まちがってマドラスに着陸したのではないかという

気がするほど南インドによく似ている。こんなふうに行く先々で既視感がつきまとうようになったのは、いったいいつ頃からだろう。こうやって人は老いていくのか……。

二つの川の合流点を左へ登り、ホテル・チャンプアンに到着。椰子の葉に似た植物繊維で屋根をふいた、それでいて優雅な様式をもつトロピカル風のホテルである。空腹だったのでチェックインするなり、部屋よりさきにホテル内のレストランに入ると、高々とした屋根におおわれた吹きぬけの三層のバルコニーだった。そこに立った瞬間、途方もなく巨大な一本の樹木に眼を奪われ、息をのんだ。

なんと威厳のある樹木だろう！ ホテルは密林状の谷間の斜面に建っていて、その巨木は水音だけが聴こえる川のほとりから生えたっているのだが、三層のバルコニーから身を乗りだしても下方の根方がよく見えないのだ。頂のほうは巨きな緑の傘となって空をおおっている。それでいて枝々はやわらかく深々と垂れさがり水滴をしたたらせている。柳のようなその枝々のやわ

らかさといったら……。無数の川がもつれあうように、樹木の血管が枝の
たちで露出してくねくねとねじれながら四方へ垂れさがり、何万、何十万と
も知れぬ美しい翡翠色^{ひすい}の葉を宙に抱きとめている。

「なんと樹木なのか？」

はしたなく息まくように訊ねると、このバリ島に一本しか生えていない
〈ボデイ〉という樹木だという。ヒンディ語の〈菩提〉の樹の訛なのか。い
やそんなはずはない。掌ほどの葉のかたちは似ているけれど、これほどまで
に巨大な菩提樹はいまだかつて見たことがない。それに一つの島に一本しか
生えていない樹木といったものが在りうるものだろうか。さらに訊ねると、
昔、この地の王族がジャワ島から持ってきて移植したのだという。

バルコニーで食事を始めても、いつこうに昂ぶりが消えない。屋久島の杉
や、アフリカのパオバヴの樹、インドのバンヤン樹など巨大な樹木には何度
か出会ってきたけれど、これほど深い胸さわぎをひき起こす樹は初めてだ。
そこに樹があると存在を意識するだけで、こちらの意識まで変容しているこ

とに気づかされる。

食事を終えるなり、三層のバルコニーから谷間の斜面を降りていった。

段々の池に蓮が浮かび、淡いピンク色の蕾をつけている。ボディの枝から滴る雨水が池の水面でやわらかく響き、ウシガエルが鳴きつづけている。熱帯の草が鬱蒼と盛りあがる樹の根方に、小さな石段と割れ門があった。登っていくと祠ほくらがあり、その背後にボディの幹が高々とそびえている。この樹に呼ばれてやってきたような気がした。挨拶したかった。靈気を感じさせる樹に出会った時は、かならず掌を押しつけて波長を合わせエネルギーをわけてもらうのだが、手が届かない。祠の石柵から身を乗りだし手を伸ばすと、黒みがかった幹には鋭い棘がびっしりと生えていた。ドリアンの実の棘のようだが、もつと硬く尖っている。体を預けるようにしてぐっと掌を押しつけたため、容赦なく突き刺さり、小さな血の玉がぶつぶつと盛りあがってきた。幸い、掌に棘は残っていない。どうしていいかわからず本能的にその血を舐めとりながら、バリとは「供物」という意味であることを思いだした。

祠のまわりにも割れ門にも、花々や米が供えられている。空港からここにやってくるマイクロバスのなかにさえ、何種類かの熱帯の花とバナナと米の供え物が据えつけられていた。チクチクと痛む掌を舐めながらボディの樹を仰ぐと、巨大な緑の傘が空にひろがり、葉がゆらめき、とめどなく水が滴ってくる。ふっと、これでよし、と思った。バリ島の聖霊の樹に、自分の血をほんの何滴か供えたような気がしたのだった。

火の玉のような気魄も……

かすかに紫色がかってみえるほど空の青が濃い。紫外線がみなぎっているのか、そんなことを考えかけては、いやいや、可視光線とは波長がちがうから肉眼で見えるはずはないと思い直す。その青空のどこかに、いつもかならず雨雲のきざしが湧きかかっている。初めは蒼穹の隅っこの鼠色のシミにすぎないが、しばらく忘れているうちに水を孕^{はら}んだままむくむく膨張して、滝のように襲ってくる。

温かい雨だ。

南緯八度何分かのここには四季の変化などなく、雨期と乾期、その二シーズンしかないのだという。いまは雨期。ドリアンの実が甘く熟れてくる時だ。昔から私の好物である。「地獄の臭い、天国の味」と言われるほど強い異臭